

EToS 報告書 1
EToS Research Report Series No. 1

風土(FUDO)から江戸東京へ Edo-Tokyo Seen from Fudo

安孫子信編
Edited by Shin Abiko



EToS

江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies

和辻哲郎が着想し、オーギュスタン・ベルクが発展させた方法論としての「風土」、それは日本発ではあるが、今や世界で普遍的に使用されている知的ツールである。本書は、その「風土」を、国際的かつ学際的立場で改めて方法として用いて、江戸東京の本質に迫ろうとした研究集会の成果報告集である。表紙写真は、法政大学が主催し、ベルク氏も登壇者として参加した2016年アルザス・シンポジウム（「人間の試練にさらされる日本の〈自然〉」）の際に、エクスカージョンで訪れたオーケニスブル城から望んだヴォージュの山並み。（撮影：鈴木裕輔）。

はしがき

文部科学省 平成 29 (2017) 年度「私立大学研究ブランディング事業」支援対象に選定された事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」を展開するにあたり、法政大学には「江戸東京研究センター」が2017年度に設立されましたが、同センターを構成する4つの研究プロジェクトのうちの2つ「江戸東京の〈ユニーク〉さ」と「アートとテクノロジー」は、2018年7月7日と8日の両日に、法政大学で「風土 (FUDO) から江戸東京へ」と題する国際シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムでは、法政大学でもかつて教鞭をとった哲学者和辻哲郎 (1889 - 1960) が構想し、フランスの地理学者オギュスタン・ベルク (1942 -) がその後発展させた「風土学」の方法と立場に基づき、江戸東京の特質を、日本、フランスそしてブラジルからの計12名の発表者が、哲学、都市論、文化学、文学、思想史、美学、建築学などの諸側面から熱く議論を展開しました。発表者全員が和辻の『風土—人間的考察』(1935年)とベルクの『都市の日本—所作から共同体へ』(1993年)を前もって読み込んだうえで、それぞれの立場から、江戸東京の「珍しさ」(和辻)について論じており、江戸東京が絞られた視点から、しかも、きわめて多様に語られています。こうした多様な江戸東京論12編を、今報告集は、シンポジウムでの発表順に収めています。また、シンポジウムの発表言語は日本語とフランス語であったため、前者については英訳、後者については和訳を用意し、会場の聴衆に、当日、配布しました。本報告集にはその翻訳文も、対訳の形で収めました。

こうして、シンポジウムがそうであったように、この報告集も、言語的にも内外に開かれたものとなっており、江戸東京に関心を寄せる多くの皆様に、あらためて、また別様に、江戸東京について考えるきっかけを与えることになればと編者としては願っております。

2019年2月

安孫子 信

(法政大学・江戸東京研究センター・プロジェクトリーダー)

〈脱中心化〉と〈再中心化〉 ——風土学の本質的契機

木 岡 伸 夫

はじめに

〈出会い〉とは何か

〈中心〉の二義性

脱中心化

再中心化

江戸から東京へ

はじめに

参加と発表の意図——私の構想する風土学の基本的な立場を理解していただくこと¹。その概要は、配布済みの拙著『〈出会い〉の風土学』に示したが、その中ではベルク風土学の本質を、「〈脱中心化〉と〈再中心化〉」によって特徴づけている（第7回、p.94～）。和辻・ベルクの風土学を参照枠とする今回のシンポジウムにおいて、〈脱中心化〉と〈再中心化〉という二つの本質的契機が、両者の学問をいかに規定しているかを論じるとともに、私自身の立場——二人と同じではない²——から、江戸・東京の近代化について若干の卑見を呈したい。お手許の拙著に再々言及することをお断りする。

〈出会い〉とは何か

近代科学は、一つの世界の中で閉じた完足的な理論体系（いわば「公理系」）を構築する。「一つの世界」とは、西洋の視点から見られた全宇宙であり、複数の視点にもとづく「他の世界」の存在を、視野に入れようとしなない立場である。風土学は、この立場を否定し、〈他者〉つまり異なる世界との〈出会い〉へと開かれた知のあり方を追究する。そのカギは、〈出会い〉（邂逅）にある。

〈出会い〉とは何か。二個の主体（人に限らない）が遭遇して、双方の存在を認め合う〈相互承認〉の行為である。それは、〈自己理解〉と〈他者理解〉の同時成立を意味する。〈出会い〉以前に、まず確固たる〈自己〉があって、そのうえで〈他者〉を認めるというの

ではなく、〈自己〉と〈他者〉の成立が同時的である。

〈自己－他者〉の理解は、〈出会い〉によって同時的に成立する。そうした〈出会い〉の条件は、遭遇する主体のあいだに上下・優劣の差がなく、対等格であること。一方が他方より優位に立つ場合、優者は劣者による否定を経験することがないため、その自己同一性が揺らぐことはない。劣者の側もまた、自他の優劣を承認するふるまいにおいて、自己同一性が揺らぐことはない。〈出会い〉とは、「『我なし』と同時に『我あり』の瞬間」³、自他の弁別が崩壊して、自己同一性の危機が生じるという事実である。

大乘仏教の祖師龍樹『中論』冒頭には、「八不」（四組の二重否定）の一つとして、「不一不異」が掲げられている。この語が表すのは、二者の「同一にして別異」の関係性である。これが、拙著の最後（第12章）に取り上げた〈縁〉にはかならない。人と人が出会って〈縁〉を結ぶ行為、それをもたらず論理が「アナロジー」（アナログイア）である。

風土学の死命を制するのは、この意味における「アナロジー」であり、その実践によって、出会う主体に「不一不異」の認識が生まれる。それは、言い換えれば、自他のあいだに〈似る－似ない〉の重なりが生じる、ということである。私と汝は、〈似る〉とともに〈似ない〉。正反対の二つの事柄が、同時に成立することが、〈出会い〉の要諦である。

和辻は、ヨーロッパ留学への途次、異なる風土に接する過程から、〈自己理解〉と〈他者理解〉が同時に成立するアナロジーを体得し、『風土』の中でそれを行使した——アナロジーの方法論的自覚にまで至らなかったにしても。本発表では、和辻における二段階のアナロジーがいかなるものかを再説することはしない（拙著「第5回 方法としてのアナロジー」を参照されたい）。〈脱中心化〉と〈再中心化〉にとって、アナロジーこそが決定的な条件である、という点を次に説明する。

〈中心〉の二義性

形式的に言えば、〈中心〉から出て〈周辺〉に赴くことが〈脱中心化〉、〈周辺〉から〈中心〉に復帰することが〈再中心化〉である。とはいえ、〈中心〉には、以下のような二義性があることに注意しなければならない。

(a) 誰にとっても、おのれの住まう土地とその周辺が〈中心〉であり、それ以外の場所は〈周辺〉である。〈自己の世界〉という意味の〈中心〉は、主体ごとに異なる。和辻にとっては「日本」、ベルクの場合には「フランス」、が〈中心〉になる。〈中心－周辺〉の位置関係は、両者のもとでまったく対照的である。この意味における〈中心〉を「風土的中心」(centre médial, cm) と名づける。

(b) 文化の発信源としての〈中心〉と、それを受容する〈周辺〉。周知のとおり、近代世界における〈中心〉は西洋であり、アジア・日本は〈周辺〉に位置する。この意味における〈中心〉を、「文化的中心」(centre culturel, cc) と呼ぶことにする。近代都市の

範型を生み出したヨーロッパは、この意味における〈中心〉であり、それ以外の地域は〈周辺〉である。この意味での〈中心-周辺〉関係は、歴史的に固定化されている。

(a)と(b)が重なるベルクの場合には、〈脱中心化〉と〈再中心化〉のダイナミズムは理解しやすい。しかし、二つの〈中心〉が一致しない和辻における〈脱中心化〉と〈再中心化〉の様相は、ベルクの場合よりも複雑である。二人のありようを、単純に「対称的」と言って済ませることはできない。この点を断ったうえで、まずベルク、次いで和辻における〈脱中心化〉と〈再中心化〉を見ていく。

脱中心化

文化大国フランスを出て、極東の島国日本に赴いたベルク。彼が発見したのは、『空間の日本文化』が描き出すとおり、たとえば主語の欠落によって、主体の地位が不確かな「場所中心主義」をしるしづける世界、フランスとは異質な精神圏である。一見すると、ベルクは故国と似ても似つかない特殊な文化を日本に見出したかのようである。だが、そうではない。ベルクは日本という〈鏡〉におのれを映し出す所作をつうじて、場所を含む風土を一切考慮しないデカルトの二元論⁴に対する批判的視座を確立する。それは、異国日本に、それまで自覚しなかった自己像が映し出されたということである。日本との〈出会い〉による〈脱中心化〉とは、まさにこのようなものだ。

要するに風土性は二元論に異を唱える。私にとって、この非二元論が徐々に明らかになってきたのは、はっきり言えば北海道での研究、次いで日本全般についての研究をつうじてであり、和辻が風土性に与えている定義を理解したときよりも、ずっと前のことだった⁵。

日本文化にふれたことの衝撃とそこから生じた自己反省が、フランス人である〈自己〉と日本人という〈他者〉のアナロジー——「不一不異」の自覚——をベルクにもたらしたことは、明白である。

次いで、和辻の場合。渡欧への途次、和辻にとって最大の〈出会い〉は、「沙漠」「沙漠の人間」とのそれであった。その理由は、「沙漠的」が「非青山的」と言い換えられるように、「青山の人間」(自己)と「非青山の人間」(他者)という一対の認識⁶が成立するからである。そのことは、二つの風土(モンスーンと沙漠)における気候と人間性の結合が、たがいに反転する関係を構成することからも明らかである。

[風土] [気候] [人間性]

モンスーン——湿潤：受容的・忍従的

沙漠——乾燥：戦闘的・服従的

「モンスーンの(青山的)人間」である自己と、「沙漠的(非青山的)人間」である他者。二種の風土(的主体)の発見は、同時的であり、同時的でなければならない。「沙漠的人間」という〈他者〉の発見は、それ自身が〈脱中心化〉の所作である。なぜなら、そのような〈他者理解〉は、現象学的な「感情移入」(Einfühlung)とは異なり、自身とは異質でありながら、まさにそういうものとして理解可能な他の実存との遭遇を意味するからである。

再中心化

〈脱中心化〉は、必ずそれに続く〈再中心化〉を伴う。〈再中心化〉とは、他者との出会いによる揺らぎ(自己相対化)を経験した主体が、自己を回復する所作である。〈脱中心化〉と〈再中心化〉——二つの契機は、たがいに媒介し合い、反復される。

ベルクの場合。日本との出会いによって、二元論を超える非二元論の自覚が生まれた(脱中心化)。しかし、二元論自体を清算する道はありえない。二元論と非二元論、それぞれの有効性と限界を見極めつつ、双方の立場を往き来する「通態化」(trajection)のみが、とるべき選択肢となる(再中心化)。こうしてメゾロジーの核心をなす「通態化」が、他のだれ一人として想到しなかった仕方です式化される。

和辻の場合。1927年に留学先のベルリンで待ち受けていたのは、刊行直後のハイデガー『存在と時間』であった。航海中に知った「さまざまの風土」との出会いに、解釈学的現象学との出会いが加わって、「人間存在の空間性・風土性」を照準とする風土学の構想が生まれる。日本を出てヨーロッパに赴いた和辻の場合、他の日本人留学生と同様、憧れと不安が半ばする中での洋行であったかと推察される⁷。そうした場合、「風土的中心」(cm)は忘却されるのが、通常の習いである。それはともかく、二元論と対決したベルクの場合とは異なり、和辻にとって、日本が対決すべき「文化的中心」(cc)として屹立したとは考えられない。〈脱中心化〉の意識は、ベルクに比べて稀薄であったと考えられる。というのも、ヨーロッパ留学中の和辻にとって、二つの〈中心〉——cmとcc——は別々にあって、重なり合うことがなかった。とすれば、それらがぶつかつて葛藤を生む事態も生じなかったはずである。

帰国後の〈再中心化〉は、どうか。ベルクの「通態化」のように、アイデンティティ・クライシスを含むドラスチックな帰結が生じることはない。そこに生起する感概は、いわば西洋と日本の都市的現実に関する落差を前にしての、なすすべのなさ、にほかならない。『風土』第三章「日本の珍しさ」が、それを証明する。日本にいて近代的都市化の進行を目の当たりにするものの、西洋都市という「文化的中心」(cc)を体験していない彼に、その現象を「珍しい」とする視線は、まだない。「珍しさ」の視線が生じるのは、留学先で西洋都市の実情を知った、帰朝者の位置においてである。

ヨーロッパに落ち着いた和辻にとって、西洋都市は〈周辺〉ではなく、自己の出自を

忘れさせる新たな〈中心〉であった。文化的中心(cc)の磁力内にとどまるかぎり、「現代日本文明の錯雑不統一」(文庫版191頁)などは忘却され、問題にならない。問題が生じるのは、西洋文明基準に順応した準「外国人」の視線で、再び近代化途上の日本を見るとときである。つまり、〈脱中心化〉後の〈再中心化〉(cmへの回帰)の過程が、日本人和辻に現代日本都市の〈矛盾〉を自覚させた、ということになる。

和辻にとっての〈矛盾〉は、むしろベルクにおけるそれではない。和辻から半世紀後の東京で、乱雑極まる開発の現状を糾弾するベルクの判断基準は、自らが育ってきた西洋都市の「都市性」(urbanité)に置かれている⁸。この基準には、まったく揺らぎがない。それは、古代以来の西洋が維持してきた都市設計の理念であり、日本の農村出身者和辻にとって、知的理解の埒内ではありえても、感覚的身体的には受けつけがたい体思想である⁹。

風土学の先駆者である和辻とベルク。二人の下で、それぞれの流儀による〈脱中心化〉と〈再中心化〉が遂行された。ここから、日本の都市の近代化について得られる展望を、若干論じることにした。

江戸から東京へ

近世江戸から近代東京への歴史的变化、という本シンポジウムのテーマに、ベルクと和辻の風土学がどう適用できるか。ベルクのキーワード「都市性」は、物質的構造としての都市(ville)と都市共同体(cité)の統一——通態化——によって実現する。言い換えるなら、〈構造〉と〈意味〉の統一が、各都市に固有の都市性、つまりその都市ならではの〈形〉¹⁰を生む。江戸の都市性が明確な〈形〉を表していたのに対して、明治以後の近代的都市計画は、前者に代わるべき新たな〈形〉を生み出していない。このギャップを慨嘆するベルクの提言は、「私たちの時代の「町屋」の発明」¹¹に取りかかろう、という呼びかけに要約される。

和辻には、ベルクのような都市に関する洞察を望むべくもない。近代都市のありようをめぐって、和辻は「風土的中心」(cm)と「文化的中心」(cc)の乖離に直面する。彼に「日本の珍しさ」を書かせたものは、そうした現場での動揺である。この事実、二つの〈中心〉のはざまにあって、どこにおれ自身を再定位するかという深刻な課題が、当時の和辻の前に横たわっていたことを物語る。いや、それは、1930年代の和辻にかぎらず、80年余を経た現在も、われわれの答えを待ち受けている課題である。

- 1 『邂逅の論理』(2017年)刊行をもって隠退する予定を翻して、社会活動を継続中。とはいえ、公的な研究歴をまもなく閉じる予定。それまでに、自身の理論を世に問う機会があれば、どこにでも出向く用意あり。その意味で、風土学に関係するテーマで開かれる今回の催しは、願ってもない好機である。
- 2 4つのシリーズは、「Ⅰ 風土学入門」「Ⅱ 和辻風土学」「Ⅲ ベルクの風土学」「Ⅳ わが風土学」から構成される。自説を最後に置く図々しさ！
- 3 九鬼周造『時間論 他二篇』[小浜善信編]岩波文庫、2016年、20頁。
- 4 「私は一つの実体であり、その本質ないし本性は考えるというだけにあって、存在するためにはどんな場所も要せず、いかなる物質的なものにも依存しない」(Descartes, *Discours de la méthode*(*Oeuvres*), Paris, Garnier-Flammarion, 2008, pp.38-39. デカルト『方法序説』谷川多佳子訳、岩波文庫、1997年、47頁)
- 5 ベルク『風土学はなぜ 何のために』「第四章 通態化」木岡伸夫訳、関西大学出版部、近刊予定。
- 6 和辻哲郎『風土——人間学的考察』岩波文庫、1979年、55 - 56頁。
- 7 出発前に、3年の留学期間を半分にする意図を同僚に明かし、実際に1年半で帰国した事実が物語るとおり、和辻は留学に対して最初から消極的であった。
- 8 ベルクは、1942年、モロッコのラバト (Rabat) で生まれ、その地で育った後、パリに移って学問を修めた。フランスという〈中心〉と北アフリカという〈周辺〉の関係が、彼にとっていかなるものであったかは、非常に興味深いテーマであるが、筆者にはそれに立ち入るだけの用意がない。
- 9 西洋の都市居住の形態を「長屋」(『風土』191頁)と評する和辻にとって、住まいの規準は生家(姫路近郊の医院)の庭付き屋敷であった。東京下町の長屋を共感的に見るような視線は、和辻にはなかったはずである。
- 10 ベルクは日仏の都市性に関して、「日本の都市性は時間の中の形を強調し、フランスの都市性は空間の中の形を強調する」(『都市のコスモロジー——日・米・欧都市比較』篠田勝英訳、講談社現代新書、1993年、54頁)という見解を表明する。
- 11 『都市の日本——所作から共同体へ』宮原 信・荒木 亨訳、筑摩書房、1996年、103頁。

« Décentralisation » et « recentralisation » : Les deux moments essentiels de la mésologie (*fûdogaku*)

Nobuo KIOKA

Introduction

Qu'est-ce que la « rencontre » ?

Les deux significations de « centre »

Décentralisation

Recentralisation

D'Edo à Tokyo

Introduction

Le but de ma participation et de la présente communication lors de ce colloque international est de faire entendre la position fondamentale de la mésologie (*fûdogaku*) telle que je la conçois. Son esquisse a été tracée dans mon dernier livre : *Deai no fûdogaku* (『〈出会い〉の風土学』 Mésologie de la rencontre). Dans ce livre, j'ai présenté la mésologie de M. Berque en la caractérisant par deux moments essentiels : « décentralisation » et « recentralisation » (voir le texte, p.94 et sv.). Lors de la présente communication, où je prendrai pour cadre la mésologie de Berque et celle de Watsuji, tout en exposant la manière dont tous deux déterminent leur approche à travers les deux moments essentiels que sont la décentralisation et la recentralisation, j'entends expliciter mon point de vue, qui est distinct de celui de Berque ou de Watsuji, concernant notamment un cas concret : la modernisation de la ville d'Edo en Tokyo. Au besoin, je renverrai à mon livre, *Mésologie de la rencontre*, que

je vous ai déjà distribué.

Qu'est-ce que la « rencontre » ?

Les sciences modernes conçoivent au sein d'un monde des systèmes clos et complets – autant dire, une « axiomatique ». L'expression « un monde » signifie ici un univers total entendu du point de vue occidental et dont la position ne prend point en compte l'existence des « autres mondes » fondés sur des points de vue pluriels. La mésologie (*fūdogaku*) rejette cette vue, elle cherche des savoirs ouverts à la « rencontre » avec les « autres », autrement dit avec des mondes différents. Le mot-clé de cette discipline est ainsi la « rencontre ».

La compréhension « soi/autre » s'établit en même temps à travers la « rencontre ». La condition d'une telle rencontre est qu'il n'y ait pas de différenciation hiérarchique ou de supériorité, mais une relation égale entre deux individus se rencontrant. Si l'un prend le dessus sur l'autre, le prédominant, n'ayant pas l'expérience de la négation du soi par l'inférieur, son identité propre n'est pas ébranlée. Quant à l'inférieur, ne pouvant qu'approuver la prédominance de l'autre, son identité à soi n'est point non plus ébranlée. La « rencontre » est l'« instant où à la fois 'je ne suis pas' et 'je suis' » (Kuki Shūzō, *Traité du temps*). Cela signifie que la distinction « soi/autre » s'écroule et que naît une crise de l'identité à soi.

Au début du *Traité du milieu* (『中論』, *Madhyamakakārikā*) de Nāgārjuna (龍樹), illustre tenant du bouddhisme du Grand Véhicule, dans ce que les commentateurs nomment les « 8 négations » (「八不」, 4 paires de binégation), il est question du « ni identique ni différent » (不一不異). C'est la relationnalité entre deux éléments qui étant identiques sont aussi différents. Il ne s'agit de rien d'autre que du « lien » (縁, *en*) dont il a été question à la fin de mon livre (chapitre 12). Dans la rencontre de deux personnes, la logique qui rend possible l'acte qui fait lien (*en*), c'est la logique de l'analogie (*analogia*).

Ce qui fixe le sort de la mésologie (*fūdogaku*) est l'« analogie » en ce sens. L'« analogie » engendre une reconnaissance du « ni identique ni différent » entre

les sujets qui se rencontrent, en d'autres termes, entre soi et l'autre elle engendre une superposition entre le fait de ressembler et celui de ne pas ressembler. Entre vous et moi, surgit simultanément deux faits parfaitement contraires : « nous nous ressemblons » et « nous ne nous ressemblons pas ». Il s'agit là d'une réalité nécessaire à la rencontre.

Watsuji, lors du voyage qui le conduisit à des études hors de son pays (à destination de l'Europe), par l'expérience que fut celle de « milieux divers » (さまざまの風土), apprit concrètement l'analogie qui établit concomitamment la « compréhension du soi » et la « compréhension de l'autre ». Il en a fait usage dans son ouvrage intitulé *Fūdo* – bien qu'il ne soit pas parvenu à une prise de conscience méthodologique de l'analogie (voir le commentaire que j'en fais aux pages p.58-59, puis 72-73). Je n'expliquerai pas de nouveau en quoi consiste l'analogie à deux étages chez Watsuji (voir « 5^e : l'analogie en tant qu'une méthode » 「第5回 方法としてのアナロジー」). Je vais néanmoins désormais expliquer que l'analogie est une condition décisive tant pour la « décentralisation » que pour la « recentralisation ».

Les deux significations de « centre »

Formellement, la décentralisation est le fait de sortir du « centre » pour atteindre la « périphérie », alors que la recentralisation est le mouvement inverse : le retour de la périphérie au centre. Il faut néanmoins prêter attention au fait que le terme de « centre » peut avoir deux significations :

(a) Pour qui que ce soit, un terrain et ses alentours, qui constituent ensemble notre lieu de vie, signifie le « centre » ; et en dehors de cela, c'est « périphérie ». Le « centre » qui signifie « monde à soi » est pour chaque sujet différent. Pour Watsuji, c'était le « Japon » et pour Berque c'est la « France ». La relation entre le centre et la périphérie est chez eux inverse. Un tel centre, il y a lieu de le nommer « centre médial » (cm).

(b) Le « centre » est en tant que source culturelle vis-à-vis de la « périphérie » qui en reçoit les fruits. Comme tout le monde le sait, le « centre » dans le

monde moderne, c'est l'Occident, tandis que l'Asie ou le Japon, en revanche, se situent à la « périphérie ». On nomme le « centre » en ce sens « centre culturel » (cc). L'Europe n'est autre que ce « centre » qui a produit le paradigme de la ville moderne. Elle se distingue des régions périphériques non européennes. La relation entre le centre et la périphérie est ainsi fixée historiquement.

On peut parfaitement comprendre la dynamique de « décentralisation-recentralisation » chez Berque pour qui (a) le centre médial coïncide avec (b) le centre culturel. Toutefois, dans le cas de Watsuji chez qui ces deux centres ne coïncident pas, le mode de cette dynamique nous semble plus complexe. Il n'est pas suffisant de dire que les deux cas que constituent les vues de Berque et de Watsuji sont « symétriques ». Je vais donc les analyser tous deux.

Décentralisation

Berque est parti de France pour s'immerger au Japon, un pays insulaire extrême-oriental. Il y a découvert un monde marqué par son « lococentrisme » (場所中心主義), dans lequel, notamment, le statut du sujet reste incertain en raison du manque de sujet verbal (cf. *Vivre l'espace au Japon*, P.U.F, 1982). C'est une sphère spirituelle très étrangère à la France. Berque y a-t-il trouvé une culture particulière n'ayant rien de ressemblant avec son pays natal ? Absolument pas. Par un geste consistant à projeter son image spécifique à travers le miroir que constitue le « Japon », Berque établit une position critique radicale à l'encontre du dualisme cartésien qui n'avait aucunement rendu compte du milieu incluant le « lieu ». Le Japon, pays étranger, fonctionna comme un miroir réfléchissant à Berque sa propre image telle qu'il n'en avait jamais pris conscience. La « décentralisation » causée par la « rencontre » avec le Japon fut ainsi pour Berque.

En un mot, la médiance récuse le dualisme. Ce non-dualisme m'était en fait devenu peu à peu évident, tout simplement en travaillant sur Hokkaidô, puis sur le Japon en général, longtemps avant d'avoir compris la définition

que Watsuji donne de la médiance.

Il est évident que le choque causé par le contact avec la culture japonaise et la réflexion qui en suivit sur lui-même a engendré une sorte d'analogie entre « soi » français et « autre » japonais : une conscience à soi comme « ni identique ni différent ».

Passons à Watsuji. Pour lui, lors de son voyage vers l'Europe, la plus grande « rencontre » fut sans doute celle avec le « désert » ou l'« homme désertique », parce qu'y surgit une reconnaissance par paire de l'« homme bleu-montagneux » (青山の人間) qui est « soi » et de l'« homme non bleu-montagneux » (非青山の人間) qui est l'« autre ». Il est évident que cela, l'union du climat et de l'humanité au sein de deux milieux (un milieu de mousson et l'autre de désert), fut du fait de la constitution d'une relation de renversement respectif :

[milieu (<i>fûdo</i>)]	[climat]	[humanité]
mousson	moiteur	passif ; soumis
désert	sécheresse	combatif ; obéissant

Le « soi » est l'« homme moussonier (blue-montagneux) » et l'« autre » est l'« homme désertique (non blue-montagneux) ». La découverte de ces deux milieux (ou sujets médiaux) devait se faire concomitamment. La découverte de l'« homme désertique » en tant qu'« autre » est elle-même un geste de la « décentralisation », parce qu'une telle « compréhension de l'autre », différente de l'empathie (*Einfühlung*) phénoménologique, signifie une rencontre avec une autre existence qui est hétérogène, mais néanmoins compréhensible en tant que telle.

Recentralisation

La « décentralisation » ne peut pas ne pas s'accompagner de la « recentralisation » consécutive. Cette dernière est le geste d'un sujet ébranlé (relativisé) par la rencontre avec l'autre pour rétablir le « soi ». Alors, «

décentralisation » et « recentralisation », ces deux moments, se médiatisent l'un l'autre et se répètent.

Dans le cas de Berque, est née par la rencontre avec le Japon une conscience de soi à l'égard de son non-dualisme dépassant alors le dualisme. C'est sa « décentralisation ». Cependant, il n'est pas de chemin dissipant le dualisme lui-même. Nous ne pouvons que prendre un aller-retour entre deux positions contraires, dualisme et non-dualisme, c'est-à-dire la « trajection », qui nous assure de leur efficacité et de leur limite. Il s'agit de la « recentralisation ». Ainsi, d'une manière que personne n'avait été en mesure d'envisager, la « trajection » fut formulée par Berque.

Revenons à Watsuji. Ce qui l'attendait en 1927 à Berlin, destination de ses études à l'étranger, était *Sein und Zeit* (de Heidegger) juste alors publié. La rencontre avec « divers milieux », s'additionnant à la rencontre de la phénoménologie herméneutique, lui a permis de poser les idées fondamentales de la mésologie (*fūdogaku*) en tant qu'elle est focalisée sur la « spatialité et la médiance de l'existence humaine » (人間存在の空間性と風土性). On peut conjecturer qu'il, sortant du Japon pour aller en Europe, se trouvait dans un état mélangeant excitation et inquiétude, comme tout japonais vivant à l'étranger. Dans tel cas de figure, le « centre médial » (cm) est d'ordinaire oublié. De toute façon, pour Watsuji, à la différence de Berque, le Japon ne pouvait se dresser face à lui en tant que « centre culturel » (cc) à combattre. La conscience de la « décentralisation » chez Watsuji aurait été assez faible comparée à celle de Berque, puisque pour Watsuji en Europe, les deux centres (cm et cc), en restant séparés, ne se heurtèrent nullement au point d'engendrer entre eux deux un conflit.

Quelle fut sa « recentralisation » de retour au Japon ? Il n'y eut pas de conséquence majeure comprenant une « crise d'identité » telle que peut être comprise la « trajection » chez Berque. L'émotion éprouvée par Watsuji aurait pu être exprimée comme suit : nous ne savons comment faire devant la différence de niveau entre l'Occident et le Japon s'agissant de la réalité urbaine

? C'est ce que nous montre le chap. 3 de *Fûdo* : « curiosité du Japon » (「日本の珍しさ」). Quand il se trouvait encore au Japon, bien que témoin du processus d'urbanisation moderne, il ne manifesta point encore de sentiment de curiosité, puisqu'il n'avait pas fait l'expérience du « centre culturelle » (cc) ; l'expérience de la ville européenne. C'est de retour de l'étranger, ayant vu les villes occidentales, que surgit ce sentiment de curiosité.

Pour Watsuji qui avait vécu en Europe, la ville occidentale n'était pas la « périphérie », mais un nouveau « centre » faisant oublier sa propre origine japonaise. À moins de rester dans le champ magnétique du cc, le « désordre et l'incohérence de la civilisation moderne du Japon » 「現代日本文明の錯雑不統一」 (*Fûdo*, p.191) s'oubliait, elles étaient mises hors du sujet. Ce phénomène devint une difficulté lorsqu'il rentra dans un Japon qui connaissant une modernisation importante et sur lequel Watsuji exerça alors un regard de « quasi-étranger » – habitué qu'il fût aux standards de la civilisation occidentale. En somme, le processus de « recentralisation » (retour au cm) après la « décentralisation » engendra chez Watsuji, lui qui était d'origine japonaise, une conscience de la « contradiction » de la ville moderne du Japon.

Si Watsuji ressentit une « contradiction », ce n'est fut cependant le cas pour Berque. Ce dernier, rencontrant l'aménagement actuel de Tokyo un demi-siècle après Watsuji, prend pour critère de jugement l'« urbanité » de la ville occidentale dans laquelle il est né et a été élevé. Ce critère n'ébranle pas Berque dans la mesure où il s'agit de l'idée même de la construction urbaine maintenue depuis l'antiquité en Occident. Cette notion d'urbanité fut, quant à elle, loin d'être acceptable par la sensibilité corporelle de Watsuji, originaire du Japon rural, quoiqu'elle pu l'être dans son intelligibilité.

Les deux pionniers de la mésologie (*fûdogaku*) sont Watsuji Tetsurô et Augustin Berque. À partir de leur propre mouvance ont eu lieu tant la « décentralisation » que la « recentralisation ». Nous discuterons pour terminer cette communication de la modernisation de la ville japonaise.

D'Edo à Tokyo

Comment pourrions-nous mobiliser la pensée mésologique de Watsuji ou de Berque pour répondre à la question que pose l'actuel colloque, à savoir : le développement historique qui fit passer du monde d'Edo à celui de Tokyo. Le concept clé d'« urbanité » se caractérise chez Berque par l'unification, par trajection, de la « ville » en tant que structure matérielle et de la « cité » en tant que communauté urbaine. Nous pourrions dire, en d'autres termes, que l'unité de la « structure » et du « sens » produit l'« urbanité » propre à chaque ville, c'est-à-dire, les « formes » propres à chacune d'entre-elles. Alors que l'urbanité d'Edo s'exprimait par une « forme » définitive, l'aménagement de Tokyo, ville moderne, n'a pas encore produit de « forme » nouvelle en lieu et place du modèle ancien. La proposition de Berque, déplorant ce décalage, se résume en l'invitation suivante : « inventer une *machiya* qui soit de notre temps » (*Du geste à la cité*, Gallimard, 1993, p.88).

En revanche, on ne peut pas espérer de Watsuji une perspicacité concernant l'urbanisme semblable à celle de Berque. Ce premier se trouva face au décalage entre centre culturel et centre médial s'agissant du mode d'être de la ville modernisée. Ce qui le conduisit à écrire sur la « curiosité du Japon », c'est l'ébranlement qu'il ressentit face à la scène actuelle japonaise. Cet épisode nous fait savoir qu'il existait chez lui une question importante : « où se ré-orienter entre les deux centres ? ». Mais en réalité, ce problème n'est pas circonscrit à l'époque de Watsuji (les années trente), et il convient à nous, 80 années plus tard, d'y apporter une réponse.

- 1 Berque translates *fūdoteki keishō* 風土的形象 as medial phenomena in the English written article (Berque 2004, 389). In the French translation (Watsuji trans. Berque 2011), *fūdoteki keishō* 風土的形象 is translated as *phénomènes médiaux* (Watsuji 2011, 35). In the discussion about the fundamental theory of milieu, Watsuji has used the words *fūdo no genshō* 風土の現象, that was translated in French as *phénomènes de milieu* (Watsuji 2011, 39 and 54)
- 2 In the 2011 French translation of Watsuji, the expression *ningen no jiko ryōkai* 人間の自己了解 is translated as “l’entente-propre humain”. This could be translated as a “human project-specific agreement”. In this text, the expression “self-definition” associates Watsuji’s expression to the process of social construction of nature and environment as developed by (Greider and Garkovich 1994)
- 3 In the bilingual proceedings of the conference, the word *Fūdosei* is translated as “regionality”. According to the translation of Watsuji’s book “*Fūdo, Ningengakutekina Kōsatsu*” done by Augustin Berque, *Fūdosei* is translated as *médiance*. The word *médiance* has no direct translation in English and we have opted to use the word as translated in the proceedings.
- 4 In the bilingual proceedings of the conference, the word *minzoku* is translated as “the nation”. However, taking into consideration the context of the discussion perhaps the word “ethnicity” could be more adequate.

執筆者一覧

安孫子信* Shin ABIKO#	法政大学教授 (哲学) Professor, Hosei University (philosophy)
星野勉* Tsutomu HOSHINO#	法政大学教授 (倫理学) Professor, Hosei University (ethics)
河野哲也 Tetsuya KONO	立教大学教授 (哲学) Professor, Rikkyo University (philosophy)
ジャン＝フィリップ・ピエロン Jean-Philippe Pierron	ジャン・ムーラン・リヨン第3大学教授 (哲学) Professor, Jean Moulin Lyon 3 University (philosophy)
チエリー・オケ Thierry Hoquet	パリ第10ナンテール大学教授 (哲学) Professor, Paris X University Nanterre (philosophy)
福井恒明* Tsuneaki FUKUI#	法政大学教授 (環境デザイン) Professor, Hosei University (landscape design)
橋本順光 Yorimitsu HASHIMOTO	大阪大学准教授 (比較文学) Associate Professor, Osaka University (comparative literature)
田中久文 Kyubun TANAKA	日本女子大学教授 Professor, Japan Women's University (Japanese philosophy)
衣笠正見* Masaaki KINUGASA#	法政大学教授 (比較文学) Professor, Hosei University (comparative literature)
エリー・デュering Elie DURING	パリ・ナンテール大学准教授 (哲学) Associate Professor, Paris X University Nanterre (philosophy)
木岡伸夫 Nobuo KIOKA	関西大学文学部教授 (哲学) Professor, Kanasai University (philosophy)
クレリア・ゼルニック Clélia ZERNIK	フランス国立高等美術学校教授 (美学) Professor, French National School of Fine Arts (aesthetics)
アンドレア・フロレス＝ウルシマ Andrea FLORES-URUSHIMA	京都大学特定助教 (環境学) Program-Specific Assistant Professor, Kyoto University (environmental studies)
翻訳者	
犬塚悠 Yu INUTSUKA	東京大学大学院博士課程 Ph.D. Candidate, The University of Tokyo
松井久 Hisashi MATSUI	法政大学兼任講師 Adjunct Lecturer, Hosei University
鈴木裕輔* Yusuke SUZUMURA#	法政大学兼任講師 Adjunct Lecturer, Hosei University
藤田琳 Rin FUJITA	翻訳家 Translator
石渡崇文 Takafumi ISHIWATARI	東京大学大学院博士課程 Ph.D. Candidate, The University of Tokyo
岡村民夫* Tamio OKAMURA#	法政大学教授 Professor, Hosei University

* 法政大学江戸東京研究センター (EToS) 研究プロジェクト構成員
Member of EToS' Reseach Team

法政大学江戸東京研究センター
安孫子信編

EToS 報告書 1

風土 (FUDO) から江戸東京へ

EToS Research Report Series No. 1

Edo-Tokyo Seen from Fudo

2019年3月29日発行

編集・発行：法政大学江戸東京研究センター
〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
TEL：03-3264-9682 FAX：03-3264-9884
Mail：edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp
URL：https://edotokyo.hosei.ac.jp/

印刷・製本：株式会社エイチ・ユー